

桜縁

特集●酒造りにかける

総長就任挨拶●日本大学総長・理事長 **小嶋 勝衛**

フロントランナー●いるかママ(株) **菊地 晴海**

特別取材●フリーカメラマン **宮嶋 茂樹**

先輩にインタビュー●(株)京和楽 **中村 謙司**

連載●袖すりあうも

東京都／鍼・灸・指圧のリハビリー代々木治療室
富山県／サン柳亭

連載●動物・ペットQ&A 横浜小鳥の病院 **海老沢 和荘**

連載●われら日大ファミリー **幾石 泰雄さん一家**



高度救命処置講習会でインストラクターを務める医学部ACLS愛好会のメンバーと顧問の丹正勝久教授(写真中央)

CONTENTS

総長就任挨拶

日本大学総長・理事長 小嶋 勝衛 …3

特集●

酒造りにかける ……5

- 立山酒造(株) 岡本 泰明さん
- 古橋酒造(株) 古橋 道正さん
- 北関酒造(株) 荒川 吉益さん
- 秋田酒類製造(株) 廣嶋 正彦さん

フロントランナー

いるかママ(株) 菊地 晴海さん ……10

特別取材

フリーカメラマン 宮嶋 茂樹さん ……12

先輩にインタビュー

(株)京和楽 中村 謙司さん
聞き手 国際関係学部/中條屋 百代さん …14

連載●袖すりあうも

お店紹介
東京都/鍼・灸・指圧のリハビリー
代々木治療室 ……16

お宿紹介
富山県/サン柳亭 ……17

連載●動物・ペットQ&A

横浜小鳥の病院 海老沢 和荘院長 …18

連載●われら日大ファミリー

幾石 泰雄さん一家 ……19

支部・部会紹介(生産工学部校友会、広島県支部) ……20

イベント情報 ……22

校友会ニュース ……24

お知らせ・掲示板 ……25

「桜縁」の由来

日本大学(桜)と校友の皆さんとの縁を深めるだけでなく、校友の皆さん同士の縁も大切にしたいというコミュニケーション誌を目指して、「桜縁(おうえん)」と名付けました。また、校友の皆さんに母校の教育・研究活動や後輩たちの学術・文化・スポーツ活動を「おうえん」(応援)してもらいたいという意味も込められています。

本学は総合大学とはいえ、キャンパスも離れているし、なかなか相互交流が取りにくかったのですが、最近では、総合学術情報センターの通信衛星を使った遠隔授業や、単位互換制度もでき、学部間交流が深まりつつあります。校友の皆さんも卒業してから学部間交流ができるように、この会報は、年齢層はできるだけ幅広く、学部・学科の枠を超えて一人でも多くの校友の皆さんを紹介していきたいと思っています。

IT(情報技術)が発達し、インターネットのホームページや電子メールでの情報伝達が増えていますが、この会報「桜縁」を持って、紹介する校友のお店などをふらっと訪ねて、自分も日大の卒業生だと話しかけてみるのも良いのではないのでしょうか。きっと日本大学の話で盛り上がり、新しい縁が生まれるはず。この会報をどんどん活用して、桜の縁が広がっていくことを願っています。



表紙の写真

学生の学術・研究・スポーツ活動を応援する目的で、本誌の表紙を学生のために広く開放し、活動発表の場にしたいと考えました。

高度救命処置講習会でインストラクターを務める医学部ACLS愛好会のメンバーと顧問の丹正勝久教授(写真中央)

「ACLS」とはAdvanced Cardiovascular Life Supportの略で、2次救命処置や高度救命処置の意味。1次救命処置までは、医学部のカリキュラムに入っているが2次は初期臨床研修医で受講することが目標とされている。ACLS愛好会は、平成16年10月に発足したばかりだが、顧問の丹正勝久教授(救急医学)を中心に部員約40人で活動している。医学部生、日大病院関係者はもちろんのこと、国立がんセンターや癌研病院など学外の病院も含めて、医師、看護師、医療従事者向けに、部員がインストラクターとなり、訓練用の人形を使って救命処置の実地指導を行っている。休日にも講習会は開かれ、ボランティア精神で指導に当たっている。部員の中には、日本救急医学会や「ACLS東京」認定のインストラクター資格を取った者もいる。

「部員である学生が、医師や医療従事者に指導することで医学へのモチベーションも上がるし、協調性も良くなるなどメリットが大きい。また、嫌々やるとせっかく受講した人も記憶に残らなくなるので「楽しく」をモットーに活動しています」と丹正教授。既に1次救命コースは、地元の板橋区民を対象に行っているが、今後は非医療従事者にも受講の機会を広げていきたいと、今後の活躍が期待される。

教育の場という原点に立ち返り、21世紀に「勝ち残る」日本大学へ

よい教師は自分より優れた者を育てるといいます。大学とは何よりもまず教育を受ける者のために用意された組織であり、大人が責任を持って次世代の若者を教え、育てる場なのです。中等教育との違いは、教師が新しい研究の成果をそのまま学生に伝えることができるという点ですが、その際にも、教育のプロたる者、受け手である学生のモチベーションを喚起する努力を怠ってはなりません。

大学の使命は数々あり、研究も産・官との連携も重要なのですが、私が第11代総長就任にあたって改革の根幹に据えたのは、「教育の現場あつての大学」という原点に立ち返ることです。そのためにはまず部科校を活性化し、それぞれに個性のある、良質な教育環境を整えていく必要がある。具体的な方策については、テーマに応じて各学部から専門家を集め、短期間のプロジェクトチームをつくって皆さんの知恵やアイデアを汲み取っていく考えです。

一方で、最近の学生を見ていると、ちょっとしたことでめげたり、基本的な作法ができていなかったりといった人間的な未熟さが目につきます。戦後60年、大切なのは中身だからと形式的なものを廃した結果、日本人が失ってしまったものは大きい。私はつい先頃まで理工学部長を務めておりましたが、そこでは奨学金の授与や表彰など、小さなセレモニーを頻繁に行うことにしました。彼らには、これまで正式に人前で見苦しくないふるまいをする機会がなかったわけですから、こういった経験も必要なのです。式典によって学生たちに「記憶に残る1日」を贈りたいという気持ちもあります。小さなことですが、こうした地道な工夫の積み重ねが学生たちを育てていくのです。

現在、少子化の一方で大学の数は飛躍的に増加しており、平成19年にはいよいよ「大学全入時代」を迎えることが確実視されています。大学をめぐる状況はますます厳しくなっている。その中にあっても、教育機関である大学は、企業とはまた違う闘い方をしなければなりません。総合大学としてのスケールメリットを活かしつつ、体力を落とさずダイ



日本大学総長・理事長

小嶋 勝衛 (こじま かつえ)

昭和15年東京都生まれ。38年日本大学理工学部建築学科卒業、40年同大学院理工学研究科修士課程修了。55年工学博士。58年理工学部教授。専攻は都市計画、建築計画。平成9年理工学部長・理事に就任。10年～11年、13年～14年副総長を務め、17年9月、日本大学総長・理事長に就任。(社)日本都市計画学会、(社)日本建築学会理事・評議員、日本都市計画協会副会長などを歴任。現在、日本環境共生学会理事、東京都千代田区および千葉県船橋市都市計画審議会会長ほか地方自治体の各種委員会委員など多数。

ットしていく必要があります。そのうえで、知力だけでなく体力と精神力を兼ね備えた骨太な卒業生を送り出していきたい。よく日大のOB・OGには社長が多い、それも大企業で出世の階段を上るより、自分でビジネスを起こす方が多いと言われる。こうした独立心の強さ、思い切りよさ、タフさは、今後ぜひ引き継いでいきたい。

「主婦の友」跡地整備に関しては、市ヶ谷、三崎町、お茶ノ水を結ぶ日大アカデミック・ベルトゾーン(地帯)のシンボルとして、どうすれば最も価値ある使い方ができるか、再検討を行っていきます。このエリアは、政治の中心としての霞ヶ関、商取引の中心としての日本橋と三角形を結ぶ、まさに日本の中心です。都心における新しい大学のありかたを提示し、地元の方々にも心から喜んでいただくためには、決定までのプロセスも大切にしなければなりません。新しい建物が、未来の卒業生たちにとって誇りを持てるような母校のシンボル、21世紀に「生き残る」のではなく、「勝ち残る」日大のシンボルとなる日を期待していただきたい。

キャンパス・グラフ Campus Graph!

(記事・写真提供 日本大学広報部)



小嶋新執行部がスタート

原点に戻り、厳しい環境に立ち向かう。小嶋新体制がスタートした。役員改選後の初の理事会は9月10日開かれ、森田賢治理事長の任期満了に伴う新理事長に小嶋勝衛総長を選任。総長が理事長兼務となり、副理事長に高田邦道常務理事が選任された。常務理事は岸田宏隆、市川忠廣、高田、田中英壽の4氏が選ばれた。

晴れの新総長・理事長就任式

小嶋勝衛総長・理事長の就任式は9月21日、日本大学会館大講堂で行われた。式壇には理事ら役員が着席。式場には本部、部科校役教職員など570人余が出席し、埋めつくされた。開会の辞に続いて校歌を斉唱した。

就任の挨拶に立った小嶋総長・理事長は「大学を取り巻く環境は大変厳しい。学校基本調査速報を見ても小中の生徒数が大変な減り方をしてい一方、大学の数はこの10年間で161校増えている。世に言う“大学バブル”なのかもしれない。まもなく18歳人口が減少、少子化は顕著になる。難局に向かっていくと実感する」との現状認識を示した。



医学部創設80周年記念シンポジウム

「21世紀の寿命」をテーマにした国際シンポジウムが7月2日、日本大学会館で開かれた。医学部の創設80周年を記念するシンポジウムで、米国と中国の3人の研究者が講演。教職員や医学部の学生、同窓生のほか一般市民など250人が参加した。



ホットな母校ニュースは「日本大学広報」「日本大学新聞」でどうぞ

広報部では、毎月15日付で機関紙「日本大学広報」(送料とも年1,000円)を、季刊で「桜門春秋」(送料とも年1,600円)をそれぞれ刊行しています。

また、学生記者が取材・編集する「日本大学新聞」(送料とも年2,000円)も学生の話題や日大スポーツを満載し毎月発行しています。

●購読ご希望の方は下記まで
広報部

TEL.03(5275)8132

FAX.03(5275)8321

日本大学新聞事務局

TEL.03(5275)8144

FAX.03(5275)8331

●ホームページも開設中

大学の情報は、ホームページでもご覧
いただけます。

アドレスは <http://www.nihon-u.ac.jp>



特集

酒造りにかける

日本酒に愛をこめて

今や世界の共通語となった「SAKE」。欧米人がスパンパーで蓋を傾ける光景は、昨今、映画の中でも珍しくないのである。日本酒が飲まれているという。しかし、さすがに正月ともなればビールやワイン、焼酎よりも日本酒が飲まれている。各地で酒造りに携わる校友の声に耳を傾け、伝統の米文化に根ざした酒造りの奥深さを「きり」として飲み口とともに味わっていただきたい。

富山

立山酒造(株)



代表取締役社長
岡本 泰明さん
(昭和54年法学部経営法学科卒業)



品質で勝負できる酒を造るには 原料と製法の管理が欠かせません

5代目の社長だった父は、私がまだ小学校低学年のころ、家にお客さんがあると私を呼んで、「ほら、飲んでみろ」と、子供に酒を飲ませては悦に入るような親でした。典型的なキリギリス型の人間でした。私はそんな父の跡を継ぐ気にはなれず、金融・証券関係の仕事に就くつもりで本学の法学部を選んだんです。ところが卒業後、銀行員として働いていると父がやってきて、会社の窮地を救うために入社してくれと。放漫経営が祟って大変なことになっていたんですよ。

PROFILE

岡本 泰明 (おかもと・やすあき)

昭和29年石川県生まれ。本学卒業後、約3ヶ年間の会社勤務を経て昭和58年、実父が5代目社長を務めていた立山酒造に入社。平成12年より6代目社長を務める。原材料の選別、製造工程の管理を本人いわく「唯物的に」「唯心的に」推し進める一方で、イメージ戦略にも積極的に参画。みすからCDを務めた新聞広告で、平成10年、11年、13年と3回にわたり読売広告賞部門最優秀賞を受賞した。二番目のお嬢さんが本年4月、日大二高に入学。もっか理工・薬学部を目指し猛勉強中。希望の「もっとおいしいお酒」はお嬢さんのアシストを受け7代目で実現されるのかもしれない。

故人となった父の負の遺産を返すのに約20年かかりました。その間、私もいろいろと勉強させられましたが、いい酒をつくるには、閉鎖的なしきたりだけに捉われてはダメです。杜氏の勘と職人芸にのみ頼る造りや、幫間の口車に乗せられる売方ではなく、客観的な評価に基づいて高品質の原料米を確保し、原料水に細心の注意をはかり、製造工程を着実に管理して、品質をアピールしてゆく必要があります。たとえば、現在、弊社では評価の高い、いくつかの「酒造好適米」のみを使用していますが、アグリビジネス研究のシンクタンクと提携して、産地協力のもと、圃場の土壌検査をさせて頂き、常に酒米の成分をチェックしています。この蔵も、私が社長に就任してから生産設備をほぼ更新しました。設計・施工に際しては、五大ゼネコンの一つである(株)竹中工務店に井戸の掘削から指示を出し、考えられる限り、最も合理的かつ効率的に高品質の酒が生産できる設備を整えたつもりです。また、醸造工学に秀でた社員も私の誇りですね。

酒というのは、案外に素直なものです。米と水それに酵母、自然の中にあるものを人間の力で上手に使役させて酒を醸すわけです。だからこそ、いい酒を飲むと、米の旨みと水の清らかさが実感できる。この品質を維持するために、今後もあまり規模を拡大せず、目の届く範囲でいいものを提供していきたいと考えています。現在、「立山」は、県内への出荷が約85パーセント。地元の皆様を筆頭に、永年にわたって「立山」をご愛顧頂く「立山」愛飲家の方々をこれからも大切にしてゆきたいですね。

実は私、ひとつだけ後悔していることがあるんです。もし最初から酒造りを継ぐと決めていたなら、本学の理工学部へ進学したのに、と。そうしたら、機械の考案も設置も全て自分でやって、今ごろもっと美味しいお酒がくれたのではなかろうかと思えます。そう思うと少し悔しいですね。

INFORMATION



■立山酒造(株)

北陸最大の年間生産量3万石を誇る名門蔵。創業は文政13(1830)年。「立山」は富山を代表する銘酒として地元での人気も高く、「祝いごとなら立山」といわれるほど。
【住所】富山県砺波市中野217番地
【電話】0763-33-3330
【URL】<http://www.tateyamabrewing.jp/>

島根

古橋酒造(株)



代表取締役社長
古橋 道正さん
(昭和35年経済学部経済学科卒業)



「初陣」でなければ、というファンを 若い層にも増やしていきたいですね

「山陰の小京都」として知られる津和野。ここには酒造りに絶好な条件がそろっています。国土庁選定の「水の郷百選」にも選ばれている青野山の湧き水、津和野産の良質な酒米「佐香錦」、そして山間の盆地特有の冬場の厳しい寒さ。低温発酵の日本酒を仕込むには、「寒仕込み」といって、この底冷えのする寒さが欠かせません。

津和野には、かつて商人屋敷が軒を連ねていた本町通り沿いに、今

PROFILE

古橋 道正 (ふるはし・みちまさ)

昭和12年島根県生まれ。地元の津和野高校から本学へ。大学時代には、実家から10本ずつ送られてくる一升瓶を下宿で友人たちと心待ちにしていたとか。35年卒業後、実家に戻って古橋酒造の5代目に。消費者ニーズの多様化に合わせ、現在では大吟醸、純米大吟醸、秘蔵酒、純米酒、にごり酒、生酒など、15種類以上の酒を製造・販売している。近年は杜氏も高齢化が進んでいるため、この冬からは6代目の長男・眞正さんが杜氏の下で技術を学ぶことに。頼りになる6代目への期待は大きい。

でもうちを含めて3軒の造り酒屋があり、昔ながらの酒造りを続けています。10月1日にはその3軒が集まって「今年もいい酒ができますように」と神社にお参りをし、11月下旬には杜氏さんがやって来て、12月、寒の時期に入るといよいよ酒造りが始まります。

作業をするのは昔ながらの土蔵倉。厚い外壁に囲まれた土蔵の中は日中でも低温が保たれ、寒仕込みには最適の環境です。昔の木桶はホウロウ製のタンクに、蒸し器の炊きつけは薪から石炭、重油バーナーへと変わりましたが、仕込みの手順は昔と変わりません。うちの蔵には兵庫県の但馬から20年来のお付き合いになるベテランの杜氏さんが来て、春先まで蔵に泊り込んでの作業が続きます。

古橋酒造の代表銘柄は「初陣」。何千石と生産していた時代もありましたが、最近はいよいよ年間300石程度ですね。そのうち問屋に卸すのは3割程度で、7割は店頭での試飲販売など、直接、消費者の方にご購入いただいています。ホームページの立ち上げ以降は、ネットをご覧になった方からのご注文も徐々に増えています。

うちの酒はすべて手作りですから、価格競争には勝てません。値段ではなく味で勝負して、「初陣」でなければ、というお客様を増やしていきたい。若い人たちに飲んでもらうための工夫も必要でしょう。その点では、6代目の長男が中心になって、使っていない酒蔵をコンサート会場として提供したり、敷地内にあった古い衣装蔵を改造して「AZUL」という酒蔵バーをつくらせたりと新しいことにも挑戦しています。これからの時代、伝統を守るだけでなく、若いファンを育てていく努力も必要だと思いますよ。

INFORMATION



■古橋酒造(株)

明治11(1878)年創業。地酒「初陣」醸造元として知られる。銘柄名は、初代が広島藩士お馬廻りとして鳥羽伏見の戦いで初陣を飾ったことに由来。店頭試飲や酒蔵見学も好評。
【住所】島根県鹿足郡津和野町後田口196
【電話】0856-72-0048
【URL】<http://www.tsuwano.ne.jp/uijin/>

特集

酒造りにかける

栃木

北関酒造(株)



製造部 係長
荒川 吉益さん
(昭和56年農獣医学部農学科卒業)



満足できる味を作るのは難しい そこが酒造りのおもしろさですね

意外に聞こえるかもしれませんが、酒造りは米作りに似ています。ちょっとした温度差や天候の違いでまったく違う出来になったりして、なかなか満足できるものがない。だからこそおもしろいんです。毎年新しい試みができますから。実は私、酒造りとともに、農業も営んでいるんですよ。実家が農家だったので、できれば農業と兼業できる仕事に就きたいと考え、現在の会社に入ったのが、酒造りを始めたきっかけなんです。

PROFILE

荒川 吉益 (あらかわ・よしえき)

昭和33年栃木県生まれ。地元の農業高校を卒業後、大学の農獣医学部農学科へ進学。卒業後は会社勤務を経て、29歳のとき、栃木県最大の醸造元である北関酒造株式会社に入社。家業である農業と兼業で清酒の製造に携わる。北関酒造では、本醸造酒のほかにも、純米、大吟醸とあらゆる清酒を製造しているが、荒川さんによると、「最近は純米酒や生貯蔵酒が人気がある」とのこと。お酒造りにはこだわりを見せる荒川さんだが、実はご本人はプライベートでは洋酒党なんだとか。



杜氏の山崎さん(写真中央)、落合工場長(同左)とともに発酵具合を確認する荒川さん

最近の「焼酎ブーム」で、日本酒業界は、はっきり言って押され気味です。でもその中であって、うちの会社は順調に売り上げを維持しています。その理由は、オートメーション化によって、安定的に大量のお酒を供給することが可能になったことと、温度や生産工程をコンピュータで管理することによって、常に高品質なお酒を造ることができるようになったことでしょう。「機械化されている」というと、とかく「誰でもできる」と思われがちですが、そうではないんです。なんといっても酵母や麹など微生物を扱う仕事ですから、その日の気候や温度、そして原料となる米の状態を見極めた上で、機械を操作したり、コンピュータにデータを入力したりしなければいけません。それには、やはり熟練した技術や経験が必要になるんです。私を含め、多くの従業員が一級酒造技能士の資格を持っているのもそのためです。

日本酒を造る際には、もろみの発酵過程で、麹の酵素によって米がブドウ糖に分解され、そのブドウ糖を酵母が利用しながらアルコールをつくっていくという「並行複発酵」が行われます。この発酵を繰り返すことによって、高いアルコール度数と清酒特有の「うまみ」と「甘み」が生み出されるのです。これは「単発酵」の焼酎には出せない味ですよ。うちの看板商品の「北冠」も、嫌味がなく、クセのない、軽くてきれいなお酒です。一度に大量に造るからこそ、すっきりした味わいが出せたりもするんですよ。今年は米の出来もいいし、美味しいお酒ができそうです。

INFORMATION



■北関酒造(株)

昭和48年に栃木県内3つの蔵元が合併して創業。早くからコンピュータ管理による生産体制を確立し、現在では主力商品「北冠」をはじめ100種類以上の商品を出荷している。
【住所】栃木県栃木市田村町480
【電話】0282-27-9570

秋田

秋田酒類製造(株)



取締役 第一営業部長
廣嶋 正彦さん
(昭和54年法学部政治経済学科卒業)



脈々と受け継がれた秋田流の寒仕込み 設備は最新でも作業は伝統の手造りです

わが社の「高清水」は、全国的な知名度を持つ清酒ですが、銘柄としての歴史は意外に新しいんですよ。秋田酒類製造は、太平洋戦争中の昭和19年、企業整備令によって、長い歴史を持つ秋田周辺の24の蔵元が統合してできた会社。そのうち12社は「高清水の十二家」として戦後も団結して酒造りを続け、現在の会社の基礎を築きました。その「十二家」のひとつが、私の生家だったんです。

PROFILE

廣嶋 正彦 (ひろしま・まさひこ)

昭和30年秋田県生まれ。生家は地酒「末廣」醸造元(昭和19年秋田酒類製造に統合)。本学卒業後、将来の仕事に役立てようとアサヒビールに入社し、18年間にわたり勤務。退社後、平成9年秋田酒類製造入社。平成15年より取締役。父の正男さんも本学ご出身。長男の正也さんも平成17年本学国際関係学部に入社という曰大ファミリー。本心では息子さんに酒造りを継いで欲しいが、「プレッシャーはかけていません。酒造りと同じで、圧力をかけずに吊るしておけば自然にいい結果が出るんじゃないかと」。



特集

酒造りにかける

私は大学卒業後、ビール会社に18年ほど勤めたあと、引退する父と入れ替わりに平成9年からこの会社に入りました。面白いと思ったのは、ビールなどのプラントでも同じ味のものができるのに、酒はその年の米の出来や気候、杜氏によって味が全然違うということ。それなのに、完成した酒には「秋田美人の肌のようにきめ細かい」と賞される「高清水」の特長がちゃんと出てくる。日本酒は幅も広いし奥も深い。蓋を傾けたくなる人が多いのも頷けます。

わが社の販売石数は年間約3万5千石。清酒メーカーとしては規模の大きいほうですが、本社の蔵では今も秋田流の寒仕込みを脈々と続けています。設備は最新式でも、作業そのものは伝統的な手造り。米を知りつくした熟練の杜氏が先頭に立ち、麹づくりから酒母づくり、仕込みまで一切手を抜かず、こだわり抜いて造っています。大吟醸に至っては、酒を絞るのに圧搾機を使わず、袋に入れて吊るし、自然に清酒が落ちてくるのを待つものもあるんですよ。

近年は杜氏の後継者が減っていることもあり、わが社でも8年ほど前から、杜氏抜きで社員が酒造りを行うコンピュータ制御の最新鋭工場をつくって、こちらでも醸造を行っています。杜氏の酒とはまた微妙に違いますが、伝統的な酒造技術を最大限に活かす設備の導入で、操業開始4日目から4回全国清酒鑑評会で金賞を受賞するほど、高い評価を受けているんですよ。

昔はビール党だった私も今ではすっかり日本酒党。なかでも上撰本醸造のワンカップは生活必需品です。首都圏では立ち飲みが流行っているようですが、早く日本酒にも追い風が吹いてほしいですね。

INFORMATION



■秋田酒類製造(株)

昭和19年秋田市周辺の蔵元24社が統合して発足。「高清水」の銘柄名は新聞の一般公募で決定した。容量別を含め現在100種類以上の商品を製造。良心的な酒造りには定評がある。
【住所】秋田県秋田市川元むつみ町4番12号
【電話】018-864-7331
【URL】http://www.takashimizu.co.jp/

潜在的な女性の能力を最大限に活用した 21世紀型の新ビジネスを札幌から発信

北海道・札幌を起点に、新しいビジネスを発信する異色のベンチャー企業「いるかママ」。そのユニークな名前の通り、この会社の事業展開は斬新なアイデアに満ちている。「女性の感性を最大限に活用し、地域密着型の新サービスを構築していきたい」と語る代表取締役社長の菊地晴海さんに、その具体的な内容をお話いただいた。

女性の潜在能力を引き出す新しい21世紀型のビジネスを創出
——菊地さんが経営されている「いるかママ」について教えてください。

「いるかママ」は、「21世紀の新サービスを創出する」という理念を掲げて、平成12年に私が設立した会社です。現在資本金が9200万円、正社員が3名の小さな「本社」なのですが、情報化社会にふさわしい新サービスの創出を図りながら、女性の潜在的な能力を生かし、地域社会に貢献する企業を目指しています。またそれと同時に、地域に密着したコミュニティービジネスも展開しています。

おもな取引先は、さっぽろコープ、北海道新聞、NTTドコモなど生活者にとって身近な存在の道内企業です。これらの企業と生活者である個人を結ぶビジネスを構築するのが私たちの仕事です。

——「いるかママ」というのは変わった会社名ですね。

イルカの群れの先頭は、おばあちゃんイルカなんです。つまりイルカは「母系」の哺乳動物ということ。また、超音波の鳴き声でコミュニケーションをとっていて、泳ぎながらネットワークを組んでいます。私たちの会社は、女性の能力を活用しながらデジタル通



「いるかママ」代表取締役社長
菊地 晴海さん（きくち はるみ）
（昭和46年商学部経営学科卒業）

昭和23年東京都生まれ。昭和33年北海道・札幌に転居。本学入学のため再び上京。卒業後は植産産業株式会社に入社。東京本社で財務や人事の経験を積んだ後、北海道支店へ異動。62年新会社ナラサキサービス株式会社創立に伴い代表取締役社長として出向。事業開始3年で単年度黒字化を達成。平成9年には売上高10億5200万円をあげ、安定的黒字化企業にまで成長させた。同12年植産産業株式会社を円満退社し、いるかママ株式会社を個人で設立。

信でネットワークを組んでいるので、そんな「母系中心で、コミュニケーションネットワークを持っている」イルカに多くの共通点を見出しました。それに「主婦を中心とした女性層に経営参画を促して事業を展開したい」という願いを付加して、「いるかママ」という社名ができたのです。一度聞いたら忘れられない名前ですね。

地域密着型の事業で「奥様」の感性・技術・経験を生かす

——主婦の能力の活用とは、具体的にはどのようなことなのでしょう？

私はさまざまな経験から、これからの社会にはおもにインターネットなどの新しいビジネスツールを使った新しい業界の仕組みができるはずだと考えました。そこで注目したのが「奥様」というキーワードです。高学歴になった主婦の方々がインターネットという道具を駆使することによって、在宅型のいろいろなビジネスができるようになりました。それなのに、北海道には女性が働く場がないんです。パートで働くといっても、スーパーのレジくらい。でも、高い学歴と生活者としての思考を持っている「奥様＝主婦」に、その能力を発揮できるステージを与えてあげれば、限らないビジネスの可能性を持っていると考えたんです。

現在「いるかママ」には、主婦150名が登録スタッフとして在籍しており、その方々に随時インターネットの掲示板を通じて仕事の情報を配信しています。彼女たちが自分の生活パターンを維持しながら無理なく仕事ができる環境を整え、彼女たちが持っている感性・技術・経験を地域社会で十分に発揮させるシステムを構築することが、当社の大きな目的なんです。

——主婦の方々は、どんな分野でご活躍なさっているのですか？

当社には女性活躍事業局というプロジェクトがありまして、ここが手がけているさまざまな事業の中で、彼女たちの能力がおおいに活用されています。

たとえば、私たちはNTTドコモと提携して、携帯電話の無料講師派遣を実施しています。携帯電話の普及は大変な勢いで進んでいますが、実はメールなどの諸機能を使いこなせていない方々が多いんです。そこで、ドコモから正規の研修を受けた「いるかママ」スタッフを、公認携帯インストラクターとして派遣。マンツーマンで携帯電話の操作指導を行っています。そのほかにもパソコン家庭教師の派遣や市場調査、北海道大学での学生モニター呼び込みなど、あらゆる仕事に主婦の方々の力をお借りしているんです。

最近では凸版印刷などのメディアと協同して市場調査などを手がけており、インタビューや分析まで行っているんですが、こうした仕事は、実際にはあまりお金になりません。それでも、組織を活性化させインフラを構築することがこの事業の目的なので、結構力を入れて取り組んでいます。インフラを整備した上でないと、メインの事業もうまく進みませんから。

札幌を起点としたリテールサポート事業で、全国展開を図る
——「いるかママ」のメインの事業とはどのようなものなのですか？

私たちのメインの事業は、POSデータを使ったりテールサポートです。具体的には、コープさっぽろ（年間売上2000億円）から日々のPOSデータを買上げ、それを加工した上で、翌日には取引先250社のメーカーさんに有料で情報開示するという事業です。

このシステムの大きな特徴は、札幌圏エリアで約100店というコープの店舗の売上データを時系列で確認できるということ。さらに、ライバルメーカーの売上データも見ることができるということです。POSデータを扱っている会社はいくつかありますが、この特徴を持っているのは当社だけです。それに加えて、システム利用料が安いというのも大きなセールスポイントです。実はこのシステムは現在特許申請中で、今期からは全国展開していきます。

——このような事業を始められたきっかけはどのようなことだったのでしょうか？

私は40歳のときに東証2部上場中堅商社の子会社「ナラサキサービス」というベンチャー企業の創業に社長として関わり、財務

や人事管理と営業といったアナログな業務全般を経験したんですね。当時はまだまだ既得権者が得をするような「建前」の社会だったんですけど、私はその中で社会のしくみを理解しながら、売り上げ10億円達成にも成功しました。

そうこうしているうちに、携帯電話やパソコンが普及してきて、時代は大きく変わりました。さまざまな規制緩和が実施されて、情報が広く開示され、より「本音」に近い社会に移行してきたんです。そんな新しいデジタル時代とアナログ時代の橋渡しの役割ができるのは、両方の時代を経験している自分しかいないと思い、新しいシステム構築をめざして「いるかママ」を立ち上げました。

残念なことには、私と同じ団塊の世代の日大OBは、北海道ではあまり元気がないんですね。だからこそ日大出身者である自分が、北海道でもうひと頑張りしたいという気持ちもあるんですよ。

最終目的は「いるかママ」を「おおよけ」にすること

——それでは最後に、菊地さんの今後の目標を教えてください。

先ほども触れましたが、今やっている事業を全国展開すること、「いるかママ」を「おおよけ」の会社にするということです。つまり株式の上場ですね。女性の力を地域の中に創出して、それを「おおよけ」にすることによって、私の仕事を完結できればと考えているんです。平成19年7月に札証「アンビシャス」上場を狙っています。

幸い、今年の6月には私たちの業績を認めてくれたコネクテックテクノロジーという会社から第三者引き受け増資を受け、上場のための資本金の増額も順調に進んでいます。最終的には資本金1億5000万円を達成するために、今年の12月に再度、第三者引き受け増資の募集を行う予定です。会社の詳細はホームページで随時確認することができるので、日大OBの方々にも私たちの事業に興味を持っていただいで、増資引受をご検討いただければ嬉しいです。



スケジュールに追われ、多忙な毎日をごさす菊地さん。「団塊世代の代表として、まだまだがんばりますよ」と意気軒昂だ



いるかママのオフィスがある
北海道産学官協働センター

会社についての問合せは、
電話011-756-8818、ホームページ
(<http://www.irukamama.co.jp/>)
またはメール
(dns05483@aurora-net.or.jp)へ

報道カメラマンとして



フリーカメラマン
宮嶋 茂樹さん(みやじま・しげき)

●プロフィール

昭和36年5月30日兵庫県生まれ。7歳の頃から父親のお古のカメラで鉄道写真を撮り始める。ロバート・キャバの影響で報道写真を志し、白陵中学・高校を経て55年日本大学芸術学部写真学科入学。59年卒業後、写真週刊誌「フライデー」の専属カメラマンとなる。62年フリーの報道カメラマンとして独立。現在は週刊文春を中心に活躍。北朝鮮、フィリピン、カンボジア、アフガニスタン、コンゴ、イラクなど世界各地で取材を敢行し、数多くのスクープ写真を発表する一方で、自らの体験を綴ったノンフィクションでも熱烈なファンを獲得。執筆はもっぱら「取材先からの滞りの飛行機の中」とか。著書に「ああ、堂々の自衛隊」(双葉社)、「不肖・宮嶋 死んでもカメラを離しません」(不肖・宮嶋 空爆されたらサヨウナラ 一戦場コンゴ、決死の撮影記)「サマワの一番暑い日—イラクのど田舎でアホ!と叫ぶ」(以上、祥伝社)ほか多数。

宮嶋茂樹公式サイトURL <http://www.fushou-miyajima.com>



平成17年8月に刊行された写真集は、日本の民間人としては最長、のべ4か月におよぶサマワ取材の集大成。イラク派遣にかかわる自衛隊の活動をおさめた全272ページ、見ごたえもズッシリの写真集だ。
『任務—自衛隊イラク派遣記録』
発行：都築事務所／発売：祥伝社
定価：本体4500円＋税

■ロバート・キャバへの憧れ

—宮嶋さんはフリーの報道カメラマンとしてカンボジア、イラク、アフガニスタン、ボスニアなど世界中の紛争地帯で撮影をなさっています。報道写真家になろうと思ったきっかけは？

父親がカメラ好きだったせいで私も7歳のころから父のお古のカメラで写真を撮っていたんですが、「報道の現場で仕事をしたい!」と思うようになったきっかけは、高校時代に読んだロバート・キャバの自伝『ちょっとピンぼけ』です。キャバは20世紀を代表する報道カメラマンで、スペイン内戦や第2次大戦のノルマンディー上陸を撮った写真などでよく知られています。彼は後にインドシナ戦争の取材で地雷を踏み、40歳で殉職することになるわけですが、『ちょっとピンぼけ』に描かれているのは第2次大戦の終戦間近、ちょうどパリが解放されるころまで。文章にも味があって、終わり方がまたいいんですよ。キャバという人はカメラひとつで世界中のどんな危険な場所にも出かけて行って、歴史を変えるような写真を撮り、そのくせ本人は堅物とは正反対の性格で、終戦を迎えるころにはちゃっかりガールフレンドと遊んでる。そういう人間臭い生き方もカッコよかった。多感な17歳のころにこの本を読んで、ああ、僕もキャバになりたい、ウォー・レスポンド(従軍記者)になって、こんな現場で写真を撮ってみたいと思ったんです。

—宮嶋さんにとって本格的な報道写真の初仕事は、昭和60年の成田闘争だったそうですが…。

まだフライデーの専属カメラマンだったころ、成田で大きな集会があるというので、ろくに現場の状況もつかめなまま、車で撮影に行っただけです。そうしたら、デモ隊と機動隊の衝突に巻き込まれて催涙弾は浴びるわ、車は壊されるわ、まったく仕事になりませんでした。使える写真なんて1枚もなかった。翌年、フィリピンでピープルズ・パワー革命が起こったときも、やはり思うような写真が撮れず、ずいぶん落ち込みました。そのとき気づいたのがこれまでの自分の写真は自己満足でしかなかったというこ

とです。報道写真で身を立てたいなら、事件の大小にかかわらずしっかりと現場を見極め、そこで撮れる写真がニーズのあるものかどうか、的確に判断しなければならない。その上で、買ってもらえる写真を撮るのがプロだと。

■日大には足を向けて寝られない

—宮嶋さんは日大の芸術学部写真学科が第一志望だったそうですね。日大に入学してからの印象はいかがでしたか？

最初に感じたのはカルチャーショックですね。明石の田舎では、自分は写真がうまいと自惚れていたんですが、日大には、そう思っている学生が全国から集まってくる。自分なんて、うまくも何ともないという現実をつきつけられたんです。1年のとき、松田義弘先生の「写真基礎」という授業があって、これは建物とか石膏像とか、ひとつの課題を決められた時間内に決められた通りに撮るというものでした。最初の課題ではクラス全員がダメ出しを食らったんですが、その後は一発できちっとOKをもらう学生が出てくる。私は何度も撮り直しをさせられてすごく悩みました。それが1年の終わりごろ、説明しにくいんですが、暗室の中で突然、ああ、こうすればいいんだと気がついたんです。その後はほとんど一発OKでした。誰が見ても「これは写真だ」と納得できる作品を仕上げるには、光学の知識も化学の知識も、それに数学の知識も必要なんですよ。

3年からは、木村恵一先生のゼミに入りました。木村先生は写真界の王道とはちょっと違う、異端ともいえるような報道写真を撮られる方で、報道写真といえばヒューマンイズム、報道写真家イコール清廉潔白な正義の味方という紋切り型に反発を感じていた私にとっては師匠のような人ですね。

今の大学生は勉強より遊びやバイトに精を出しているようですが、私は写真を学ぶのに4年間じゃとても足りなかった。遊んでるヒマなんてありませんでしたよ。今でも日大には足を向けて寝られないくらいです。

■能書きなしで人を感動させる写真を

—今後、どのような写真を撮りたいと思っておられますか？

「ペンは剣より強し」といいますが、私は、そのペンよりもさらに強いのが写真だと信じています。1枚の写真には、社会を動かす力さえあるんです。私は能書きなしで人を感動させる写真を撮りたい。報道写真は、まず「こういう写真を撮りたい」というイメージづくりから始まって、いつ、どこへ行けばその写真が撮れるかを判断し、現場へ行ったらあとは期待して待つのみ。写真として定着された映像は永遠ですが、時間でいえば実はほんの一瞬の出来事なんです。ジャンルは違いますが、ニール・ライファーというスポーツカメラマンが1965年にモハメド・アリのKOシーンを撮った有名な写真があります。KOされて大の字にのびた相手のボクサーと、片腕を上げて悠々とコーナーに戻るアリの姿を、四角いリングごと俯瞰で撮った写真なんです。まず、こういう写真が撮れるとイメージした絵心がすばらしいですよ。私もいつか、自信を持って「この1枚」といえる写真を撮りたいと思っています。



1999年6月、コンゴ。NATO軍の介入によりミロシェヴィッチ大統領が和平を受け入れ、ひとときの平和が訪れる。アメリカ兵の進駐を早朝から路傍で待つ撮影

学生が先輩にインタビューする企画です！

先輩にインタビュー

こだわりの丹波産黒豆を使い、製造から小売まで——
培った人脈をもとに、45歳で起業に踏み切りました



●株式会社京和楽 代表取締役

中村 謙司さん (なかむら けんじ)

(昭和56年農獣医学部食品経済学科卒業)

昭和34年千葉県生まれ。本学卒業後、香川県小豆島にある丸金醤油株式会社(現マルキン忠勇株式会社)に入社。大阪、神戸を中心に働く。平成7年に千葉に戻り、関連会社である丸金食品勤務に。平成16年3月に退社。4月に京都・美山にて株式会社京和楽を設立。平成17年4月、「Beans Café 京和楽」をオープン。丹波産黒豆を使ったさまざまな商品を開発。百貨店や通信販売などでも販路を広げている。



こだわりの丹波産黒豆を主役に、和のテイストのお菓子を揃えるカフェが京都にある。その名も「Beans Café 京和楽」。オーナーの中村謙司さんは、長年勤めた醤油メーカーから独立したばかりで、工場での製造とカフェ経営に忙しい。今回は起業に関心のある中條屋百代さん(国際関係学部国際ビジネス情報学科)が、独立に至るまでの道のりや成功の秘訣を聞いた。

製造から小売りまで、すべてを自分の力でやってみたい
丹波産黒豆にこだわって、千葉から単身、京都・美山へ

——黒豆や豆乳を使った、女性好みのお菓子がたくさん並んでいますね。この創作菓子のカフェをオープンするまでの経緯を教えてください。

丹波の黒豆を使った商品を開発して、製造から小売りまでを自分でやりたいと、勤めていた会社から独立したのが45歳のときです。このカフェは、お客様の意見をダイレクトに汲み取ろうと、事業が軌道に乗ってからオープンしました。

私は大学時代、醤油を研究テーマにしていたので、卒業すると香川県小豆島にある老舗の醤油メーカーに就職しました。当時は独立しようなどという気持ちは持っていなかったんですね。ただ、営業職でのスタートでしたから、いずれ企画や商品開発をするぞという目標はありました。やがて希望の仕事に移ることができ、企画、広告はもちろん、仕入れや人事まで担当するようになり、ものを作り上げて販売するまでのあらゆる仕組みがわかってきました。同時に、これなら自分の力でできるという自信もついてきたんですね。具体的に独立を考えはじめたのは、36歳のときです。それまで大阪、神戸を中心に仕事をしていましたが、関連の食品会社に勤めることになり、実家のある千葉に戻ることになりました。この会社で扱っていたのが、黒豆だったんです。常日頃から仕入れや販売に直接関わり、扱いやすかった

ということもあり、この黒豆を使った商品を自分で作り出し、製造から小売りまでをやってみようと思えるようになったんです。

——なぜ、お菓子という形で提供しようと思ったんですか？

私がまずこだわったのは、丹波産黒豆という点でした。丹波の黒豆は粒が大きく、ブランド力もあり、何よりふっくらとしておいしいのです。そして次に、産地に近い場所で製造したかったということ。たまたま京都・美山で、使われなくなったしめじの栽培工場を見つけ、そこを工場にすることにしました。それにともない、家族を千葉に残し、私は単身、美山に移り住んだんです。

最初に商品化したのはお菓子ではなく、黒豆を煮て乾燥させた「しほり豆」や、煎った「いり豆」、黒豆のお茶などでした。しかし、お茶を作ると粉にしたものが余ったり、煮たときに割れたり皮が剥けたものは使えなかったりと、結構無駄が出るんです。原料の値段がわかっているだけに、捨てるのはもったいない。これらが無駄なく使えるようにしたいということで、混ぜ込んで使えるお菓子を作ってはどうかと。幸い、同じ会社の研究部門にいて一緒に起業した仲間が、菓子作りもできると背中を押してくれました。ただ、ここは京都ですから、和菓子で勝負したところで勝てません。それで、和菓子でも洋菓子でもないようなお菓子を目指し、黒豆を使ったプリンやパウンドケーキ、葛まんじゅうなどが生まれたんです。最近ようやく、リピーターのお客様も増えてきました。

財産は、これまでに培ってきた人脈。起業には幅広い交友関係を活用することが何より大切です

——起業するにあたって、いちばん大変なのはどんなことでしたか？

やはり資金面です。創業するときは、工場にかなりの設備投資が必要でしたから。しかし、勤めていた会社の会長、社長、部長など多くの方から個人的に出資していただき、ずいぶんと助かりました。今も原料のいくつかは、以前の会社から仕入れさせてもらっています。23年勤めた中で培ってきた人脈が、今十分に活用できている。このことは、私にとって大きな財産となっています。とはいえ、設備投資に費用をかけてしまった分、カフェのオープンにはなるべくお金をかけたくなくて(笑)。以前フランス料理店だったところを、キッチンなどはそのままにして、後は自

分たちで改装してすべて作り上げたんですよ。

——事業を行う上でいちばん大切にしていることは？

決断を早くするということでしょうか。今はとにかく社会の流れが速いので、次にどんな動きをするか、一歩先を見据えて速く動かなければなりません。そのために、スタッフとの打ち合わせを頻繁に行っています。私は、みんなで会社を作る雰囲気を作っていきたいと思っています。だから意見を出し合い、こんな会社になりたい、こんな店にしたいという話を、雑談でもいいので交わっていくよう心がけています。

——最後に、起業を考えている人たちにアドバイスをお願いします。

私の場合、はじめから独立を考えていたわけではありません。ですが振り返ってみると、会社と自分とは違うものだと思い切り、常に一定の距離を保つようにしてきたと思います。そして、会社の考えだけに染まることなく、さまざまな人と接し、さまざまな意見を聞くようにもしていました。これは就職してからでなく、学生時代からも心がけておくといいですね。日本大学には全国から多くの仲間が集まってきます。さまざまな機会に触れ、交友関係を広げておくことです。卒業して20年以上になりますが、私は今でも学生時代の友人たちとの情報交換を欠かしたことがありません。幅広いネットワークを持つことこそ、仕事をしていく上で何より大切なことだと思います。

インタビューを終えて

聞き手 中條屋 百代さん (国際関係学部国際ビジネス情報学科2年)



中村社長は、とてもチャレンジ精神の旺盛な方で、一起業家として、また、人生の先輩としてとても魅力的に感じました。お話を聞かせていただいた中で、心に響いた言葉が2つあります。まず一つ目は、挑戦心を忘れず「決めた事を諦めずにやり通すこと。」そして二つ目は、「一期一会」です。人と人とのつながりは、何にもかえがたい、とても貴重なものだと再確認しました。これらを心にとめ、夢の実現に向けて邁進していきたいと思えます。貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。



Beans Café 京和楽
【住所】京都府京都市左京区豊ヶ谷西寺ノ前町30-4 [TEL] 0120-496-906
【URL】http://www.17.ocn.ne.jp/kyowal/

OB・OGが経営している

お 店 紹 介

東京都/鍼灸・指圧のリハビリ一代々木治療室

佐野 玉恵さん

(昭和48年農獣医学部拓殖学科卒業)

鍼灸は、人間の体がもともと持っている「治癒する力」を目覚めさせるんです

風邪や発熱、ギックリ腰も治まる「養生」パワー

JR代々木駅西口から徒歩3分。通勤客からご近所のお年寄りまで、かかりつけの鍼灸院として親しまれているのが、オープン15年目を迎えたリハビリ一代々木治療室である。院長の佐野さんは、しかめっ面で訪れた方もほっと和んでしまうような温かい笑顔の持ち主。ご自身も小さい頃から体が弱く、偏頭痛や肩こりなどに悩まされたが、鍼灸と出会って人生が変わったという。

「お薬を飲んででも効果がなかった足の痛みが、鍼灸で楽になったんです。それがきっかけで興味を持ち、専門学校に通って一から勉強を始めました。長く続けられる仕事を見つけたいと思っていましたし、東洋医学の考え方にも共感できましたから」

鍼灸は、悪い部分に直接働きかけて治すのではなく、人間の体がもともと持っている「治癒する力」を目覚めさせることによって免疫力を高め、自分で病気を治してゆく手助けをする。



●プロフィール
佐野 玉恵
(さの・たまえ)

昭和24年東京都生まれ。本学在学中、ご主人である均さん(同学部獣医学科卒業)とスキー部で出会い、卒業後に結婚。結婚後、歯科衛生士の資格を取得。30代で鍼灸と出会い、鍼灸・マッサージの資格を取得。平成2年「リハビリ一代々木治療室」を開業。

「治療ではなくて『養生』なんです。風邪や発熱、ギックリ腰も1回の鍼灸で治まりますが、これも鍼灸で病気が治ったわけではなく、その方自身の免疫力が高まった結果。ただ、鍼灸だけで健康が維持できるわけではありません。サプリメントも含め、バランスのとれた食生活を心がけていただきたいですね」

女性ひとりでも安心できる雰囲気とスタッフの心遣い

家族で訪れる10年来のお客様も多いリハビリ一代々木治療室。人気の秘密は確かな技術に加え、その細やかな心遣いにある。清潔で明るい室内、ゆったりくつろげるBGM。男性スタッフが女性を担当する際は、必ず女性スタッフが目の届く範囲にアテンドするという配慮も。

「女性の場合、初めての方はよく鍼が怖いとおっしゃるんですが、ウチは患者さんひとりひとりに専用の個人針を使っています。これは使い捨ての針と違ってチクツとする痛みもないですし、本当に快適ですよ。最初はビクビクしていた人も、気持ちよくて施術中に眠ってしまうくらい。皆さん、ぜひ怖がらずに挑戦してみてください」



スタッフの皆さんと



●鍼灸・指圧のリハビリ一代々木治療室

【料金】初診料(個人用針代):3000円、鍼灸治療:5000円、指圧治療:6000円、母乳マッサージ:6000円、フェイシャルマッサージ:3000円、小児はり:2000円(0~12歳、さすりはりではありません) ※各種保険取扱(手続きについてはご相談ください)

【営業時間】月・水10:00~19:00/火・金14:00~19:00/木・土10:00~12:00(ただし第2・第4土曜のみ)

【休 日】日、祝日、第1・第3・第5土曜日

【交通】JR代々木駅より徒歩3分

【住所】東京都渋谷区代々木1-13-9-203

TEL 03-5350-3778

【URL】http://www.tsuiteru.com/sh/hari.kyu/

◎一口メモ

関節痛や風邪、発熱など、急な症状で鍼灸院を訪れた際、鍼を敬遠して指圧を望む人も多いが、実は赤ちゃんからお年寄りまで、急性の症状に最も効果的なのが鍼。指圧は、むしろ慢性の症状に向いている。どのような方法で、どの部分を刺激するのが最適か、見極めるのも鍼灸師の腕の見せどころ。じっくり相談し、納得のいく方法を選んで。

<読者への特典>

初診料無料、仕上げに10分間の指圧をサービス

OB・OGが経営している

お 店 紹 介

富山県/サン柳亭

小柳 信夫さん

(昭和46年商学部経営学科卒業)

澄みきった空気とおいしい水。この水で炊いたご飯には絶対の自信があります

黒部川の景観を一望できる癒しの宿

大正時代、黒部川の水力電源開発にともなって源泉が発見された宇奈月温泉は、黒部渓谷の玄関口に位置し、新緑や紅葉の季節には雄大な自然を楽しもうと訪れる人々で賑わいを見せる。中でも、黒部川の渓流沿いにあるサン柳亭からの眺望は絶品だ。

「全部で20室の客室のうち、10室はお部屋の窓から直接、黒部川の景色が見えます。宇奈月温泉は2年前に開湯80周年を迎えたばかり。けっして歴史の古い温泉ではありませんが、美しい自然と澄みきった空気、おいしい水が何よりの自慢です」

ご主人の小柳信夫さんは昭和46年に本学を卒業後、郷里へ戻って家業を継いだ。当初は宇奈月温泉の中心街に旅館を構えていたが、昭和60年、よりロケーションのよい現在の場所にサン柳亭を開業。平成7年には総檜造りの露天風呂も新設した。

「小さな宿ですから、いたずらに規模を広げるつもりはありません」



●プロフィール
小柳 信夫
(こやなぎ・のぶお)

昭和23年富山県生まれ。地元の桜井高校から本学へ。卒業後、家業を継ぎ平成7年よりサン柳亭社長。現在は宇奈月温泉旅館協同組合理事長としても活躍中。美人女将の博美さんは昭和50年に結婚。ご息子の元さんも本学を卒業。来年1月にはお孫さん誕生の予定。

せん。地元のお客様をメインに、大型旅館にはない細やかなおもてなしを提供したいですね。その点では、私などより女将あつての旅館。私はもう、女房におんぶにだっこですよ」

女将を務める奥様の博美さんも地元のご出身。常に笑顔を絶やさず、ご主人とあうんの呼吸で旅館を切り盛りしている。

四季折々の厳選素材を使用した「越中懐石」が好評

テレビや雑誌で「グルメの宿」と紹介されたこともあるサン柳亭。富山湾直送の新鮮な魚や地元産の山菜をふんだんに使った越中懐石にはファンも多い。加えて評判なのが、農家から直接買いつけたコシヒカリをふっくら炊きあげた「ご飯」である。

「どんなにいい米を使っても、水がよくないとおいしいご飯はできません。この水で炊いたご飯は本当においしいですよ」

これからも細かい部分にまで手を抜かず、まごころを込めたおもてなしを続けていきたいと語る小柳さん。

「お帰りのお客様に『いい宿ですね、来年もまた来ます』と言われる時が一番うれしいですね」



越中懐石料理の一例

●富山県/サン柳亭

収容:122名/客室:和室20室(全室バス・トイレ付)/宴会場:大広間「松竹梅」110畳(50畳2室)/大浴場:「立柳」、「柳柳」、サウナ風呂、総檜露天風呂(男女各1)/会議室:80名収容/クラブ「勿忘草」、お好みコーナー「公孫樹」/駐車場完備

【交通】お車で:北陸自動車道黒部IC下車約15分

新幹線で:東京から上越新幹線で越後湯沢下車、越後湯沢より北越急行で魚津へ、新魚津から富山地方鉄道で宇奈月温泉下車、徒歩約7分

【住所】富山県下新川郡宇奈月町243-2

TEL 0765-62-1336 FAX 0765-62-1318

【URL】http://yanagitel.com

◎一口メモ

豊富な水量を誇る黒部川の電源開発は大正時代から既に行われていたが、何といっても有名なのが昭和31年に着工し、7年がかりで完成した「黒四ダム」。この大プロジェクトを題材に石原裕次郎主演で映画化されたのが「黒部の太陽」だ。ダム建設時に敷設された全長20kmのトロロコ電車は、アドベンチャー列車として現在も活躍している。

<読者への特典>

宿泊のお客様には夕食時に地酒1本サービス

動物
ペット
Q&A

鳥専門の動物病院は全国でも数少ない。横浜で鳥の診療にあたる海老沢さんに、鳥の健康管理について話をうかがった。

横浜小鳥の病院 海老沢 和荘 院長
(平成7年農獣医学部獣医学科卒業)

●プロフィール

海老沢 和荘 (えびさわ・かずまさ)

昭和46年茨城県生まれ。中学生時代、セキセイインコを飼いだしたことをきっかけに鳥専門の獣医を目指し、本学農獣医学部獣医学科に進学。平成7年卒業後、動物病院勤務のかたわら休診日を利用して飼鳥野鳥病院で研鑽を積み、平成9年4月、横浜市反町に単身で横浜小鳥の病院を開業。患者数の増加にともない平成12年9月、設備・スタッフとも大いに充実させ現在の場所へ移転。院長を務める。



Q ペットとして鳥を飼う際、元気で長生きしてもらうためには、どんな点に気をつけたいですか？

A まずは食事です。犬や猫の場合には、栄養バランスのとれた餌がいろいろと開発され、以前に比べるとずいぶん長生きするようになりました。でも、鳥の餌についてはまだ十分に配慮されていません。人間と同じ食べ物を与えるのは問題外ですが、餌としてよく用いられるアワやヒエも、栄養学的に見ると問題があります。人間でいえばお米だけを食べているようなもので、ビタミンやミネラルの不足から栄養失調に陥り、病気にかかりやすくなってしまいます。最近では、栄養バランスのよいペレット食も販売されていますから、餌を購入する際に気をつけていただきたいですね。

次に、飼育環境の問題があります。鳥は季節発情の動物で、日照時間が長くなると発情しますが、家の中では昼夜の明るさに差がないため季節の区別がつかず、ほぼ恒常的に発情してしまうのです。そのため、生殖器系の病気にかかる確率が非常に高い。これを完全に防ぐのはたいへん難しく、日が落ちたら部屋を真っ暗にし、日の出とともに光を入れなければなりません。また、人に話しかけられたり、触られたりする

ことも鳥の発情を促進します。可愛いからといって過剰に相手をするのは、鳥の健康にはあまりよくないんですよ。でも、せっかく飼っているのにかまってやれないのはつらい。ですから、発情している時はできるだけ早く寝かせたり、巣作りの材料になるようなものを与えて刺激しないよう注意して、様子を見ながら飼っていただくのがベストだと思います。



Q 動物病院のなかでも、鳥の手術まで手がける病院は少ないようです。どのような工夫をなさっているのですか？

A この分野で一番研究が進んでいるのはアメリカ。新しい文献などにはできるだけ目を通し、最新の情報を収集するようにしています。幸い、この病院には鳥好きの仲間が大勢いますから、議論しながら勉強しているという感じですね。もともと鳥は麻酔に弱く、血液の量も少ないため、手術が非常に難しい。確立された手術マニュアルなどもありませんので、治療の工夫は獣医のセンス次第ですね。以前、発情のトラブルから重度のヘルニアになってしまったセキセイインコの手術をする際、あるアイデアがひらめいて、普通なら腹部をまっすぐ切開するところを、あえてX字に切開して周囲の皮膚を切除し、術後に縫合してみたことがあります。通常、ヘルニアの患者から卵管を摘出し、腸や筋肉を体内に戻すと、お腹の周囲にゴワゴワした黄色っぽいぶくらみが残ってしまう。ところが、X字型に切って適切な箇所の皮膚を切除しておく、縫合後すっきり元通りの体型に戻れるんです。治療というより整形の一種ですが、この方法を見つけたときは「やった!」と思いましたね。うれしくて、早速ほかの獣医さん達にも情報を公開しました。鳥は一般に短命というイメージがあるようですが、オウムなど、種類によっては30年、40年生きる鳥もいます。鳥たちが天寿を全うする手助けができるよう、これからもがんばっていききたいですね。

●横浜小鳥の病院

[診療時間] 一般外来受付 午前9:00~11:30 午後4:00~6:30 ※予約制
[休診日] 木曜日・祝祭日の午後
[交通] 京浜急行線 子安駅下車 徒歩2分
[住所] 神奈川県横浜市神奈川区子安通1-2-10
TEL 045-453-3010

鳥をこよなく愛し、治療に情熱を燃やす仲間が集う横浜小鳥の病院。現在、海老沢院長を含め7名の獣医師、5名の看護師が診療や看護にあっている。鳥専門の動物病院は全国でも15程度と数が少なく、ペットを連れて北海道や沖縄から飛行機で来院する方もいるとか。オウム目、スズメ目、キジ目、ハト目、カモ目、キツキ目、鳥類のほか、ハムスターなどのげっ歯類やウサギも診療している。

<http://www.2u.bigjob.ne.jp/~avian/>

われら日大ファミリー
幾石 泰雄さん一家きせきレディースクリニック院長
幾石 泰雄 (きせき・やすお)

昭和33年東京都生まれ。産婦人科医院を開業していた父の影響で医師をめざし、本学へ。昭和59年本学医学部卒業。在学中には医学部サッカー部の主将も務める。63年同大学院修了、医学博士号取得。日本大学医学部産婦人科助手を経て平成5年より社会保険横浜中央病院産婦人科勤務。12年より部長。平成17年9月きせきレディースクリニック開業。日本産婦人科学会専門医、日本医師会認定産婦人科、日本大学医学部産婦人科非常勤講師。平成15年には、「患者が決めたい病院のグッド・ドクター」に選ばれた。奥様である尚美さんのお父様とお兄様も本学医学部OBという日大ファミリー。

平成17年9月、東京都杉並区浜田山の住宅街の一角に、日大医学部出身のご夫婦がふたりで診療にあたる女性専用のクリニックが誕生した。カンガルー親子のロゴマークが目印の「きせきレディースクリニック」である。

院長を務める幾石泰雄さんは、昭和33年生まれの47歳。浜田山で産婦人科医院を開業しておられたお父様の影響で医師をめざし、日大医学部へ。医学博士号取得後は、本学産婦人科助手を経て大学の医局から社会保険横浜中央病院に出向、平成12年には産婦人科部長に就任し、着実に勤務医としてのキャリアを重ねてきた。一方、平成9年に結婚した8歳年下の奥様、尚美さんは、医学博士号を取得後、平成9年から土木建保厚生中央病院産婦人科の非常勤嘱託医。そのままお互い勤務医を続けるという選択肢もあったのだが、あえて開業に踏み切った理由を、泰雄さんはこう語ってくれた。

「最近、出産・分娩が、設備の整った大病院に集中する傾向があるんです。横浜の病院にも、遠いところからわざわざ出かけてこられる患者さんが大勢いました。妊娠中はちょっとした風邪や不調も気になるもの。そのたびに身重の体で遠くまで出向くのは気の毒ですよ。気軽に相談できるクリニックが近所であれば、不便さも解消される。地域医療への貢献という大げさですが、これからは、幅広い層の女性の悩みに応えられる『家庭医』のような専用クリニックが必要だと思ったんです」

クリニック開設にあたっては、自らも出産経験を持つ副院長、尚美さんのアドバイスを全面的に採用したという。

「緊張感がほぐれるような明るい雰囲気の内装など、患者としての立場から『こうだったらいいな』という意見を出しました。ロゴマークにもこだわったんですよ。出産・分娩の設備こそありませんが、杉並区内ではあまり設置されていないマンモグラフィ撮影装置を導入し、設備面も充実しています。私は週に1日の診療ですが、院長と力を合わせて地域医療に貢献していきたいですね」と尚美さん。



奥様で副院長の尚美さん(右)と

クリニックのモットーは、「あらゆる年齢層の女性に、親切で分かりやすいケアを」。チームワーク抜群の新しいクリニックは、女性たちの強い味方になってくれそうだ。



ロゴマークは尚美さんの叔父様がデザイン

院長の泰雄さん、副院長の尚美さん以下、スタッフの皆さんも明るい笑顔で迎えてくれる

きせきレディースクリニック (住所) 東京都杉並区浜田山3-34-3
[診療時間] 9:00~12:30 15:00~18:30 TEL 03-5316-3949 FAX 03-5316-3946
[休診日] 木曜、土曜午後、日曜・祝日 <http://www.kiseki-lc.jp/>

日本大学 生産工学部校友会

生産工学部は理工学部工業経営学科を学部の歴史起点とし、平成14年に学部創設50周年を迎え、今年53年になりました。校友会の歴史は、昭和31年工業経営学科の有志一同で同窓会がスタートし、先輩諸兄のご苦労が実り、昭和50年、生産工学部校友会として認知され、日本大学校友会加盟祝賀会を行い、正式に校友会のメンバーとして活動し、はや今年で30年目を迎え、卒業生65,247名になりました。

校友会の組織は会長、副会長、常任幹事、幹事の計210名で構成されています。校友会には、総務委員会、広報委員会、名簿委員会、財務委員会、企画委員会、事務局委員会、監査委員会、ボランティア委員会(新設、暫定)があります。

生産工学部は創設以来、現場に強い技術者、経営が理解できる技術者を育成する方針に校友会も共鳴し、時代の流れを見聞きして、新設委員会を設立し、生産工学部の方針を理解し、企業実習(インターンシップ)、就職支援、母校の運動部応援、など進めています。



平成17年度代議員懇親会

主な事業計画は

1. 卒業名簿の調査(5年又は10年に一度発行)
2. 機関紙「桜生工」
3. 学内の美化として「芸術学部卒業生作品」
4. 母校を訪ねる会(学部と協賛)
5. 顧問協議会(学部執行部との懇親会)
6. 入学、卒業祝い
7. 留学生への援助(研修旅行など)
8. 学部祭、クラブ活動、援助
9. 各部会援助金等であります。

8年間、生産工学部校友会名誉会長を務めていただきました前大谷学部長先生が、今年7月任期を終えて石井進学部長にバトンタッチされました。ありがとうございました。石井学部長は、教職員の圧倒的な支援を戴き(70%以上)、学部長へ、また7月13日より校友会名誉会長を引き受けて戴きました。石井学部長は30数年、生産工学部校友会発展の為、役員として絶大なる協力をしてくれたうえ、学部創立以来、初めて学部出身の学部長誕生と校友会一同大歓迎しております。大学と校友会は車の両輪、一歩進んで我が校友会は一心同体で大学発展、在学生、卒業生の為、又「1年の計は元旦にあり」ではないですが、日本大学の伝統復活の為、16学部校友会の総意で進めてきた箱根駅伝特別応援団が3回目になります。全国OBの皆様宜しく願いいたします。

(日本大学生産工学部校友会会長 鬼丸 三也)



鬼丸 三也会長

日本大学校友会 広島県支部

広島県支部は、原爆被爆後間もない昭和26年に第1回総会が開かれています。爾来、歴代の支部長はじめ多くの先輩諸氏の努力で毎年継続してきました。平成13年8月には第5代支部長・佐藤孜(昭和39年歯学部卒)のもとで創立50周年記念式典を行いました。来賓として瀬在幸安前総長、森田賢治前理事長をお迎えしました。また同年10月には2001・日大フェアも行われています。

平成17年は第54回総会を開催し、大学から牧野富夫副総長、校友会から田中英壽会長、鈴木彰一校友会本部事務局校友課長を来賓としてお迎えしました。当支部では、毎年大学や校友会からの講演をいただいています。今回は創立以来、初めて地元から講師をお招きしました。広島県府中・戸品地区支部長で、NHKの番組「プロジェクトX」に出演された無人小型ラジコンヘリで有名な「ヒロポー」社長・松坂敬太郎氏(昭和43年理工学部卒)で、「ヘリコプターに夢をのせて～21世紀をニュービジネスに拓く～」と題し経営哲学や生き様について熱く語っていただきました。広島県にはオンリーワン・ナンバーワンの校友が大勢おられ、我々の誇りとするところです。平成18年は三原市で第55回の記念総会を開催予定です。

広島県支部は14学部支部と8地区支部から構成されています。活動の特徴は、

- (1) 毎年の総会・懇親会の主幹が学部支部と地区支部が交代で行い、各支部の活性化を図っていること。毎年の総会参加者は、200名から300名です。
- (2) 5年に1回の会員名簿の発行をしていること。名簿に掲載されています校友は約6,000名です。
- (3) 広島県支部では広報誌「校友ひろしま」を平成9年から発行していること。今回で第9号となりました。情報交換の場として活用しています。発行部数は1,000部となっています。

これらの活動を通して、広島県支部が少しでも日本大学の発展に寄与する事が出来ればと思っています。

(日本大学校友会広島県支部幹事長 森 志郎)



佐藤 孜 支部長



Nihon University Alumni Association



平成17年度支部総会

イベント情報

12月以降の保健体育審議会所属各部の試合日程をお知らせします。

詳しくは保健体育事務局（電話03-5275-8279）までお問い合わせください。

校友会箱根駅伝振興特別委員会のホームページがリニューアルされました。今年もご支援よろしくお祈りします。

アドレスは

<http://www.nichidai-ekiden.jp/>



〈写真提供 日本大学新聞社〉



競技部	日付	大会名	場所
陸上競技部	1/2～1/3	東京箱根間往復駅伝大会	東京都～神奈川県 大手町～箱根芦ノ湖
相撲部	12/11	全日本選手権大会	東京都 国技館
卓球部	12/3～12/4	全日本学生選抜選手権大会	大阪府 なみはやドーム
馬術部	12/3～12/4	全日本学生選手権大会	東京都 JRA馬事公苑
テニス部	12/6～12/10	全日本学生室内選手権大会	兵庫県 尼崎市記念公園
ラグビー部	12/18～1/8	全国大学選手権大会	東京都 秩父宮ラグビー場他
スキー部	12/20～12/23	全日本学生チャンピオン大会(クロスカントリー)	北海道 中川郡 音威子府村
	1/4～1/7	全日本学生チャンピオン大会(アルペン)	長野県 志賀高原
	1/12～1/18	全日本学生選手権大会	// 白馬村
	1/26～1/27	全日本選手権大会(コンパインド)	北海道 札幌市 大倉山
	1/26～1/29	全日本選手権大会(ジャンプ)	// 札幌市 宮の森 白旗山
	2/9～2/14	全日本選手権大会(クロスカントリー)	// 札幌市 白旗山

競技部	日付	大会名	場所
スケート部	12/3～12/5	関東大学アイスホッケー3次リーグ戦	東京都 サントリー東伏見アイスアリーナ
	12/15～12/16	全日本学生スピード選手権大会	群馬県 伊香保スケートセンター
	12/21～12/22	全日本スピード選手権大会	長野県 Mウェーブ
	12/23～12/25	全日本フィギュア選手権大会	東京都 国立代々木競技場
	12/27～12/28	全日本スプリントスピード選手権大会	長野県 Mウェーブ
	1/6～1/9	日本学生氷上選手権大会	北海道 帯広の森
	2/24～2/26	全日本選抜スピード選手権大会	岩手県 県営スケート場
バスケットボール部	12/12～12/18	全日本学生選手権大会	東京都 代々木第2体育館他
	1/2～1/9	全日本総合選手権大会	// 東京体育館他
応援リーダー部	12/24～12/25	全日本学生選手権大会	東京都 代々木第2体育館

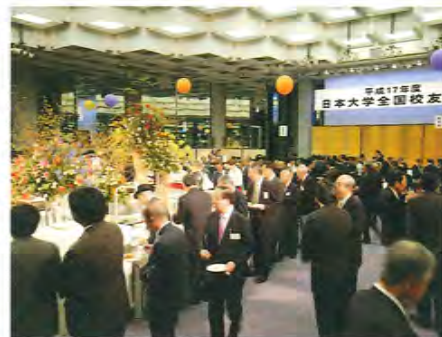
●日本大学全国校友大会を開催

日本大学全国校友大会が10月28日、赤坂プリンスホテル(東京都千代田区)で開かれた。今回は、9月1日に誕生した小嶋勝衛新総長をお招きしての祝賀の会とし、全国の日本大学卒業生が一堂に会し、大学と校友との絆を深め、また、先に行われた第44回衆議院議員選挙において当選された本学出身の議員を、卒業生とともに祝いする趣旨で開催され、校友や大学関係者約900人が出席した。

開会前のアトラクションとして応援リーダー部「DIPPERS」によるチアリーダー演技と校歌斉唱が行われた。昨年の校友名刺交換会に引き続き、TBSアナウンサーの柴田秀一さんによる司会で、岡田正美大会実行委員長の開会の辞に続いて、大会会長の田中英壽校友会会長、小嶋勝衛新総長の挨拶と続き、衆院選の当選者らがステージ上で紹介され、園田博之議員による代表挨拶の後、高田邦道副理事長の乾杯の発声で懇親会に入った。高橋祐



次郎氏らによる津軽三味線も披露され、会場は華やいだ空気に包まれ、旧交を温める懇談の輪ができていた。田村榮一大会実行副委員長による閉会の辞でお開きとなった。



●箱根駅伝を今年もバックアップ

第82回東京-箱根間往復駅伝競走が正月2日、3日に行われるが、今回も箱根駅伝振興特別委員会が組織され、応援、募金、渉外の小委員会がそれぞれの役割を分担しながら、応援体制を昨年以上に強化しバックアップしている。昨年は惜しくも第3位となったが、今年は32年ぶりの優勝を狙えるよう、校友のさらなるご支援をいただきたい。駅伝振興委員会のホームページがリニューアルされたので、そちらもご覧いただきたい。

<http://www.nichidai-ekiden.jp/>

新規公認桜門会(平成17年11月4日現在)

7月の役員総会以降に、校友会常任会で公認された桜門会は次のとおり。

- 医25桜門会
- ピーエス三菱東京建築支店桜門会
- テスコ(株)信濃町桜門会
- 関東電設(株)みちのく桜門会
- (株)白石桜門会
- 富島桜門会

お知らせ・掲示板

このコーナーは皆さんからの手紙や電話でのご意見、ご質問を紹介します。他にも写真、詩、短歌、エッセイなどの作品や、本誌で紹介したお店を訪ねた感想なども募集していますので、『桜縁』係までお寄せください。

三崎町の文学部で過ごした学生の頃とは、かなりの時代のへだたりがありますので、私のような余生短い年寄りには、「桜縁」から近代の諸情勢をとらえる一助として、黙読させていただいております。今後も有益な情報をよろしく願います。(住川泰乃・昭和28年文学部人文地理学科卒業/千葉県佐倉市在住)

日大について、もっと宣伝が必要ではないでしょうか。一般人には、日大はあまりよく知られていないと思います。少子化による学生減への手遅れになる前に、著名な卒業生を使ってメディア等でもっと宣伝する必要があります。(中野博章・昭和48年3月理工学部精密機械工学科卒業/愛知県豊橋市在住)

毎回「桜縁」が届くのを楽しみにしています。内容的にもバラエティーに富んでいて、大変良いと思います。取材や編集作業も大変でしょうが引き続きより良い誌面をお願いします。特に飲食・サービス業を含む各業界で、地道に活動している方々も取り上げていただければと思います。(成松秀樹・昭和46年経済学部経済学科卒業/神奈川県藤沢市在住)



○インフォメーション

◎本誌への情報提供、ご意見、お問い合わせは…この会報は1人でも多くの校友の皆さんを紹介し、校友の皆さん同士のコミュニケーション(縁)を深めていただきたいと思います。お店やお宿を営んでいる校友に限らず、ユニークな先輩や後輩がいるとか、自分を紹介してほしいなど、自薦他薦を問いませんので、事務局までお知らせください。

◎住所・勤務先がお変わりになられたら…住所、勤務先等に変更がございましたら、必ず事務局までお知らせください。電話、FAX、メールいずれの方法でも結構です。

◎会員証を紛失されたら…会員証を紛失された際は事務局までご連絡ください。再発行させていただきます。

◎新規会員を紹介したい…新規会員をご紹介くださる方は、事務局までご連絡ください。資料を送付させていただきます。

- 1 封筒、ハガキで
〒102-8275
東京都千代田区九段南4-8-24
日本大学校友会本部事務局校友課「桜縁」係
- 2 電話、ファクシミリで
TEL. 03(5275)9300
FAX. 03(5275)8330
- 3 電子メールで
E-mail : koyu@adm.nihon-u.ac.jp

編集後記

広報委員会・久保 進

今回のお酒特集はいかがでしたでしょうか。機械化により大量生産するにしても、昔ながらの手作業で製造している時の技が活かされているという、日本酒造りの奥の深さを実感しました。広報委員会のメンバーも一新し、心機一転、いろんな意味で話題作りをしていければと考えています。会員の皆様にはどんどん意見を出していただき、それを誌面に反映させていく双方向的な広報誌を目指していきたいと思いますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

桜縁 No.8/2006.1 発行 編集・発行 日本大学校友会
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
TEL. 03(5275)9300 FAX. 03(5275)8330

広報委員会

委員長：久保 進 副委員長：新井 謙寿
委員：内田 章 中村 克夫 石 光 園田 芳生 萩原 正芳 横須賀 靖
齋藤 直樹 呉屋 正盛 中島 正博 野澤 達也 鈴木 彰一



まずは電話でお申し込みを

日本大学文理学部 心理臨床センターをご利用ください

心理臨床センターは日本大学文理学部百周年記念館の中にあり、地域に開かれた活動を行っています。小学生から上は70代の方まで、近所に限らず、遠方からも、さまざまな心の悩みを抱えている方が相談に訪れています。開所日は、月・火・水・土曜日となっています。センターには、相談に使う6つの部屋を完備。相談内容に合わせて、専門の臨床心理士が適切に対応しています。民間の施設では50分で10,000円ほどかかる心理カウンセリング料金も、50分2,000円と格安になっています。校友のみなさんも是非ご利用ください。

★一人で悩まず相談しよう!★

育児の悩み 子どもの悩み 対人関係の悩み
ストレス ご自身の悩み 不安・緊張・ゆううつ
高齢化にともなう悩み 家族の悩み など…



箱庭療法専用ルーム



カウンセリングルーム

日本大学文理学部心理臨床センター

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水4-2-50

TEL&FAX 03(5317)9754 (直通)

*相談は全て予約制です。事前に電話でご予約ください。

◎メールアドレス cpcenter@chs.nihon-u.ac.jp

◎ホームページ <http://www.psych.chs.nihon-u.ac.jp/~center/>



プレイルームも完備

案内図

